

タイトル	山部赤人の吉野讃歌：「青垣隠り」をめぐって
著者	村山，出
引用	北海学園大学人文論集，12：A1-A22
発行日	1999-03-31

# 山部赤人の吉野讚歌

——「青垣隠り」をめぐって——

村山 出

山部赤人は吉野従駕歌を三群残しているが、このうち、柿本人麻呂の吉野従駕歌を伝統として踏襲したことが顕著に見られるのが次の一群である。

山部宿祢赤人の作る歌二首并せて短歌

やすみしし 我ご大君の 高知らす 吉野の宮は たたな  
づく 青垣隠り 川なみの 清き河内ぞ 春へは 花咲き  
ををり 秋されば 霧立ちわたる その山の いやしくし  
くに この川の 絶ゆることなく ももしきの 大宮人は  
常に通はむ (6九二三)

反歌二首

み吉野の象山の際の木末にはここだも騒く鳥の声かも

(九二四)

ぬばたまの夜の更けゆけば久木生ふる清き川原に千鳥しば  
鳴く (九二五)

この歌群は、笠金村の吉野従駕歌 (6九二〇〜九二二) に続く二つの歌群 (6九二三〜五・九二六〜七) のうちの第一群である。金村の歌の題詞によると、神亀二年 (七二五) 夏五月の聖武天皇吉野行幸における作ということになる。だが『続日本紀』にはこの年に吉野行幸があつたことは記されていない。さらに赤人の二つの歌群は、

右は、先後を審らかにせず。ただし、便をもちての故に、この次に載す。

という左注をともなっており、この解釈をめぐって異なる見解も多い。清水克彦氏は赤人の二つの歌群を神亀元年三月の聖武天皇即位直後の行幸時の作であると推定された(「赤人の吉野讚歌——作歌年月不審の作群について——」『萬葉論集 第二』昭

和55年)が、吉井巖氏は二歌群を同じ時期の作とみることに疑問を示され(『萬葉集全注 卷第六』昭和59年)、最近では伊藤博氏が、赤人の第一群(692三〜五)は神龜二年五月の詠であることは動かないとされつつも、第二群(692六〜七)は神龜元年三月の吉野行幸時の作の可能性を推測されている(『萬葉集釋注 三』平成8年)。ただ、神龜元年三月の行幸時における大伴旅人の吉野讚歌(3三一五〜三一六)の題詞下注に「未だ奏上を経ぬ歌」と記されている背景を考えると、吉野頌詩も吉野讚歌も奏上の機会が保留された可能性もあり、後考の必要があるが(拙稿「吉野の讚歌——性格と意義」、『奈良前期万葉歌人の研究』平成5年)、笠金村の題詞に見られる年月の記録はかなり信憑性があり、赤人は笠金村とともに神龜二年五月の吉野行幸に従い、その折に右の第一群を披露した可能性がきわめて高いと考えられる。

この赤人の吉野従駕歌が踏襲したと見られる人麻呂の作品は次の二群である。

吉野の宮に幸す時に、柿本朝臣人麻呂の作る歌

(a) やすみしし 我が大君の きこしめす 天の下に 国はし  
も さはにあれども 山川の 清き河内と 御心を 吉野  
の国の 花散らふ 秋津の野辺に 宮柱 太敷きませば

もしきの 大宮人は 舟並めて 朝川渡る 舟競ひ 夕  
川渡る この川の 絶ゆることなく この山の いや高知  
らす 水激く 滝の宮処は 見れど飽かぬかも(1三六)

反歌

見れど飽かぬ吉野の川の常滑の絶ゆることなくまたかへり  
見む(三七)

(b) やすみしし 我が大君 神ながら 神さびせずと 吉野川  
たぎつ河内に 高殿を 高知りまして 登り立ち 国見を  
せせば たたなはる 青垣山 山神の 奉る御調と 春へ  
は 花かざし持ち 秋立てば 黄葉かざせり一には、黄葉か  
ざし、といふ 行き沿ふ 川の神も 大御食に 仕へ奉ると  
上つ瀬に 鵜川を立ち 下つ瀬に 小網さし渡す 山川も  
依りて仕ふる 神の御代かも(1三八)

反歌

山川も依りて仕ふる神ながらたぎつ河内に舟出せずかも

(三九)

両歌における詞句の具体的な授受の関係は次のように図示  
できる。

人麻呂吉野歌 ↓ 赤人吉野歌

(a) やすみしし 我が大君の	やすみしし 我ご大君の
(b) やすみしし 我が大君	
(b) 高殿を 高知りまして	高知らず 吉野の宮は
(b) たたなはる 青垣山（山神の）	たたなづく 青垣隠り
(a) 山川の 清き河内と	川なみの 清き河内ぞ
(b) 春へは 花かざし持ち	春へは 花咲きををり
(b) 秋立てば 黄葉かざせり	秋されば 霧立ちわたる
(a) この山の いや高知らず	その山の いやしくしくに
(a) この川の 絶ゆることなく	この川の 絶ゆることなく
(a) (反) 絶ゆることなくまたかへり見む	もしきの 大宮人は 常に通はむ

赤人歌は人麻呂歌(a)・(b)二首からほぼ同程度の詞句の表現を襲用しつつ変容させ、構成に工夫を凝らして新鮮味を出そうと試みている。つまり伝統の継承と創造を実践していると言えるであろう。

このなかで、赤人歌の「青垣隠り」は人麻呂歌の「青垣山」を踏まえながらも、異質のものとなっているように思われる。

人麻呂歌の場合は「山神」の憑りつく山そのものに対する讚美の表現であろう。その讚美は「山神」と「川の神」の奉仕によつて、自然神を服従する「我が大君」の神聖かつ超越的な姿を崇高なものとして讚仰敬慕する心情に結びついている。これに対して、赤人歌の場合は「吉野の宮」のあり方を示す表現の一端を担いつつ、山に囲まれる領域を讚美する表現である。

天皇の臨む「吉野の宮」の讚美には先例がある。養老七年（七二三）の笠金村の吉野従駕歌（6九〇七）では、

み吉野の 秋津の宮は 神からか 貴くあるらむ 国からか 見が欲しくあらむ

と国土の神聖尊貴性において、また神亀元年（七二四）の相伴旅人の吉野従駕歌（3三一五）では、

み吉野の 吉野の宮は 山からし 貴くあらし 水からし さやけくあらし

と自然の清浄尊貴性において讚美されていた。しかし赤人歌は、金村・旅人の両歌には見られなかった「やすみしし 我ご大君」の詞句でも人麻呂歌の表現を踏まえつつ、さらに「青垣隠り」の表現は、人麻呂歌の「青垣山」を踏まえるかに見えるながらも、澤瀉久孝氏（『萬葉集注釋』昭35）が指摘されたように古事記歌謡の「たたなづく 青垣 山ごもれる」（記三〇）の表現に加担

したとおぼしい表現をとっている。そこにどのような意味が込められようとしたのであろうか。

この「青垣隠り」の意味について、折口信夫氏は、

〔青垣〕 山などを見立て、言ふ語。青い垣の様な山。青垣ごもりと言ふのは、青垣で囲はれて中に籠もつてゐると

言ふ事（『折口信夫全集 第六巻』昭和41年）

「青垣」は、青葉の木の垣を意味するか、或は家のうちに立てる絹垣の青いものを意味するのか、どちらにしても比喩である（『折口信夫全集 第十巻』昭和41年）

と述べられたが、「青垣山」あるいは「青垣隠り」については、金子元臣氏『萬葉集評釋』（昭和10年）、窪田空穂氏『萬葉集評釋』（昭和25年）、武田祐吉氏『増訂萬葉集全註釋』（昭和31年）、澤瀉久孝氏『萬葉集注釋』（昭和32年）、土屋文明氏『萬葉集私注』（昭和51年）、伊藤博氏『萬葉集全注 巻第一』（昭和58年）、吉井巖氏『萬葉集全注 巻第六』（昭和59年）などの諸注もほぼ同様の見解を示しておられ、そのなかでも、「青垣隠り」の讚美性と表現意図について、最も詳細に説明しているのが窪田氏（『萬葉集評釋』）で、

「青垣」は、青い色の垣で、青山が垣の如き状態をもつて、四方を繞らしてゐる意。

「隠り」は、宮がその内に籠つてゐる意。神の宮は清浄なべき処として、その周囲から隔離する為に垣を繞らすのが習ひとなつてゐるのであるが、芳野の宮は、疊づく青山がその垣となつてゐるといふので、宮を讚へるには最もふさはしい語である。

と説かれたのは、基本的に肯定できる説明であろう。

別に、土橋寛氏（『古代歌謡全注釈 古事記編』昭和47年）は古事記歌謡（三〇）の表現「青垣 山ごもれる」の注釈の中で、「カキはある領域を、他から区画するために置かれているもの（施設）」と指摘されているように、「垣」は実現化する見立てに基づくもので、ある区域を占有することを示すのは勿論、時には聖域とか特定の意義をもつ場と認識される領域を形成するもの、といつてよいであろう。それを上代における「垣」の具体例によつて確認しつつ、「青垣隠り」の表現の意義について考えてみようと思う。

## 二

以下に上代文献に求めた「垣」を含む語例をあげて検討するが、人名・地名・宮名などに含まれる例は省略する。なお、傍

線部は原文のままであることを示す。

まず、基本的な「カキ・カキネ」から見ることにしたい。

カキ（垣）・カキネ（垣根）

a ①…家ゆ出でて 三年の間に 垣もなく 家失せめやと 此

の箱を 開きて見ては…（万葉9一七四〇） 高橋虫麻呂集

b ②垣越しに犬呼び越して鳥獵する君 青山の茂き山辺に馬休

め君（万葉7一二八九） 柿本人麻呂集

③春されば卯の花ぐたし我が越えし妹が垣間は荒れにけるか

も（万葉10一八九九） 作者未詳

④うぐひすの通ふ垣根の卯の花の憂きことあれや君が来まさ

ぬ（万葉10一九八八） 作者未詳

⑤忘れ草垣もしみに植ゑたれど醜の醜草なほ恋ひにけり

（万葉12三〇六二） 作者未詳

c ⑥蔽々し 久米の子らが 加岐本に 植ゑし山椒 口疼く

吾は忘れじ 撃ちてし止まむ （神武紀、歌謡一二二）

⑦みつみつし 来目の子等が 介耆本に 粟生には 韭一本

其のが本 其芽繋ぎて 撃ちてし止まむ

（神武紀、歌謡一二三）

⑧みつみつし 来目の子等が 介耆本に 植ゑし山椒 口疼く

く 我は忘れず 撃ちてし止まむ （神武紀、歌謡一四）

⑨時に鬪鶏国造、傍の径より行く。馬に乗りて籬に莅み、皇

后に謂りて、嘲りて曰く、「能く園を作るか、汝や」といふ。

（允恭紀、2年2月14日）

d ⑩狭手彦、乃ち百済の計を用ちて、高麗を打ち破りつ。其の

王、墻を踰えて逃ぐ。（欽明紀、23年8月）

⑪軍衆、悉に漏せて城空しく、將軍迷ひて如く所を知らず。

時に日暮れ、垣を踰えて逃げむとす。（舒明紀、9年）

⑫淡路公、幽憤に勝へず、垣を踰えて逃ぐ。

（称徳紀、天平神護元年10月22日）

e ⑬遂に宮室を起つ。天皇、乃ち遷りたまひ、号けて後飛鳥岡

本宮と曰ふ。田身嶺に、冠らしむるに周垣を以ちてす。田身

は山の名なり。此には大務と云ふ。（齊明紀、2年）

⑭保良宮の諸殿と屋・垣とを諸国に分ち配りて、一時に功を

就さしむ。（淳仁紀、天平宝字6年3月25日）

⑮従七位上大秦公忌寸宅守に従五位下を授く。太政官院の垣

を築くを以てなり。（桓武紀、延暦4年8月23日）

f ⑯八雲立つ 出雲八重賀岐 妻籠みに 八重賀岐作る その

八重賀岐を （神代記、歌謡一）

⑰や雲たつ 出雲八重賀岐 妻ごめに 八重賀岐作る その

八重賀岐を （神代記、歌謡一）

⑱汝等、八塩折の酒を醸み、亦、垣を作り廻し、其の垣に八つの門を作り、門ごとに八つのさずきを結び、其のさずきごとに酒船を置きて、船ごとに其の八塩折の酒を盛りて、待て。  
(神代記)

⑲県の坤のかた二十余里に一禿の山あり。關宗の岳と曰ふ。頂に靈しき沼あり。石の壁もて垣とせり。

(風土記、肥後国關宗県)

⑳神つ社の周匝は、卜氏の居所なり。(略)嶺の頭に舎を構らば、松と竹とは垣の外を衛り、谿の腰に井を掘らば、薛と蘿とは壁の上を蔭ふ。(略)神仙の幽り居む境、靈異の化誕るる地と謂ふべし。  
(風土記、常陸国香島郡)

㉑(塩田)川の源に洩有り。深さ二許丈なり。石壁は峻峻しく、周匝りは垣のごとし。  
(風土記、豊後国藤津郡)

㉒神、禱告を聴きて、遂に賀毗礼の峰に登りたまひき。其の社は石以て垣と為し、中に種属甚多し。

(風土記、常陸国久慈郡)

㉓舟二百隻を以ちて、石上山の石を載みて、流の順に宮の東の山に控引き、石を累ねて垣とす。時人誇りて曰く、「狂心の渠。損費すこと、功夫三万余。損費すこと、造垣功夫七万余。(略)」  
(齊明紀、2年)

額田巖氏によると、「カキ」の語源は「カクミ(囲)」「カクシ(隠)」にあり、前者によって縄張り・結界・障屏・占有・防護・防衛、後者によって隠匿・障蔽・垣間見の機能が考えられ、土地を囲って自分の所有権を確立し、また隠すことによって環境が整い、内部を保護することができるといわれる(『垣根』昭和59年)。

aの①は「家」と対に表現されているように、狭義の私的生活領域を意味しているであろう。それがbの②～⑤のような相聞的な歌では、賀古明氏(『万葉集新論 万葉情意語の探究』昭和40年)が説かれたように「人目を忍ぶ恋」の場を象徴する意味をもつであろう。

cの⑥～⑧にあつては久米氏一族の生活領域を示して広義の勢力圏を意味するであろうし、⑨もこれに準じてよいであろう。dの⑩～⑫はさらに支配圏を意味するであろう。境界の「垣」をこえて他の領域に移るのは、別の結果を希求することを意味した。③の相聞歌において「我が越えし妹が垣間」と表現されたのは忍ぶ恋の成就を意味するであろうし、⑩～⑫のように自分の支配圏の境界を越えて離脱することは戦意喪失による敗北を意味し、⑫のように他の支配管理圏の境界を越えることは解放、この場合は幽閉からの脱出を意味するであろう。

それが、eの⑬～⑮のように、宮廷・宮室に関する「垣」となれば、一般の生活居住地である俗から峻別されるべき權威の所在を示す聖域を意味するであろう。さらに特別の境界領域を意味するのがfの⑯以下であろう。

⑯・⑰は、大地の靈力の現れである雲を幾重にもめぐらせて「垣」を作り、その中に妻を置くという。これは、新居における祝婚歌であろうが、八重の「垣」は神殿とか宮殿を想像させ、聖なる結婚を祝福するための宮殿ほめの意味をもつ歌であろう。この「垣」は次の神域に含めて考えることも可能な性格を見せる。

⑱は、八俣の大蛇という荒ぶる神（のちに守護神となる）を迎える特別な場の「垣」であろう。⑲～⑳の「垣」は靈妙の地、神仙の住む世界を表し、㉑の表現は微弱ながらこれらに準じて考えてよいであろう。㉒は天下った立速男命の祟りに、朝廷は片岡大連を遣わして敬い祭らせ、民の住む近くは不浄であるから、清らかな山に鎮座するように祈ると、賀毗礼の峰に登ったという。これらの「垣」は俗から聖を峻別して神靈を依拠せしめる神域を意味する。

gの㉓は「狂心の渠」といわれるもので、後に有間皇子の謀叛事件を挑発する口実にも利用される。その用途は用水路かと

もいわれるが不明である。

カキツ（垣内）・ヲカキツ（小垣内）

a ①小垣内の 麻を引き干し 妹なねが 作り着せけむ 白栲

の 紐をも解かず……（万葉9一八〇〇） 田辺福麻呂集

b ②我妹子が家の垣内のさ百合花ゆりと言へるはいなと言ふに

似る（万葉8一五〇三） 紀豊河

③恋しけば来ませ我が背子可伎都柳末摘み枯らし我立ち待た

む（万葉14三四五五） 作者未詳

c ④：我が背子が 垣都の谷に 明けされば 榛のさ枝に 夕

されば 藤の茂みに……（万葉19四二〇七） 大伴家持

⑤鶯の鳴きし可伎都ににほへりし梅この雪にうつるふらむか

（万葉19四二八七） 大伴家持

d ⑥：神なびの 清き御田屋の 垣津田の 池の堤の 百足ら

ず 斎槻の枝に……（万葉13三三三三） 作者未詳

「カキツ・ヲカキツ」は「垣」と殆ど同じ意味であるが、特に生活領域の内側に重点を置き、その内部の存在や所行、さらには心情や權威の及ぶ範囲を重視した表現である。

aの①は行路死人の挽歌であるが、夫が横死したとは知らずにその帰りをひたすら待っているであろう妻の愛を想像する生動的な場としての表現であり、bの②～③の「垣内」は「人目



を忍ぶ恋の場」であろう。cの④⑤は屋敷内の意味で、④は部下の久米広繩の館に近い鶯の鳴く谷を誇張して表現したものの。dの⑥は神饌の米を作る神田で、いうまでもなく聖域である。

カキホ(垣ほ)

a①:虚木綿の 隠りて居れば 見てしかと いぶせむ時の

垣廬なす 人の問ふ時…… (万葉9一八〇九)

高橋虫麻呂集

b②垣穂なす人言聞きて我が背子が心たゆたひ逢はぬこのころ

(万葉4七一一三) 丹波大女娘子

③垣保なす人の横言繁みかも逢はぬ日数多く月の経ぬらむ

(万葉9一七九三) 田辺福麻呂集

④垣廬なす人は言へども高麗錦紐解き開けし君ならなくに

(万葉11二四〇五) 作者未詳

「ホ」は目立つて見えるもので、例えば葦垣の葦の穂などの状態をいうようであるが、万葉歌の例はいずれも「垣ほなす」と比喩的に用いられ、aの①は「人」が垣のようにとり囲んでいる状態であり、bの②④は「人言」が垣のように二人の間を邪魔をしている状況を意味しており、本来の領域を区画する意味が比喩に転用されたものである。

以上、「垣」の基本的な例について見たところ、「カキ・カキネ」では、dのように支配圏を意味する場合、eの国家的権威の所在を示す聖域を意味する場合、fのように神霊の依拠する領域を意味する場合があること、「カキツ」にもdのように聖域を意味する場合があることが確かめられた。

三

さらに「垣」の例に、(1)素材を名称にもつ「葦垣」「柴垣」「青柴垣」「竹垣」「綾垣」「絶垣」「石垣」、(2)造作を名称に示す「荒垣」「組垣」「籬」「韓垣」、(3)特別な用途による名称をもつ「斎垣」「玉垣」「瑞垣」「宮垣」「御垣」が見出されるが、これらの何れにも属さない特殊な例が「歌垣」と、小論で問題にする「青垣」なのである。

これらの諸例のすべてをここで取り上げる煩は避けて、小論の主題にかかわる例だけについて見ることにするが、言及しない例は後注に掲げることにはしたい。

素材を名称にもつ「カキ」の中で注目されるのが「青柴垣」である。

アヲフシカキ（青柴垣）

①故爾くして、天鳥船神を遣して、八重事代主神を徴し来て、問ひ賜ひし時に、其の父の大神に語りて言はく、「恐し。この国は、天つ神の御子に立て奉らむ」といひて、即ち其の船を踏み傾けて、天の逆手を青柴垣に打ち成して隠りき。

柴を訓みて布斯と云ふ。

（神代記）

②「今し天神、此の借問ひたまふ勅有り。我が父は避り奉るべし。吾も違ひまつらじ」といふ。因りて海中に八重蒼柴籬を造り、柴、此には府璽と云ふ。船柁を踏みて船柁、此には浮那能倍と云ふ。避りぬ。

（神代紀）

記紀のいわゆる国譲り神話に見出される例で、天照大神の使の建御雷神に葦原中国を譲渡するにあつて、大国主神の子二柱の神のうち、事代主神が帰順の意志を示し「天の逆手」を打つて船を「青柴垣」に変え、そのなかに隠れたと伝える。益田勝実氏によれば、大国主神の子と伝えられる事代（言代）主神は、本来大国主神を齋き祭つた者（司祭権とともに支配権を掌握していた）が神格化されたものなので、国譲りによつて支配権を奪われた敗者として自殺するが、大国主神のみは引き継ぎ祭られるという事情を語っており、事代主神が神おろしの齋庭をもうけて、神がかりしながら儀礼的な死を遂げた、その秘所が「青

柴垣」であつたらうと示唆深い考察をしておられる（『廃王伝説

——日本の権力の一元流——、『火山列島の思想』昭和43年）。青柴垣は青葉のついた柴、常緑の小木で塞ぎ困つた垣のことで、ふさぐものを「フシ（塞）」といい、この場合の柴はふさぎに用いられたので、記紀では特に「柴」をフシと読むと注記されている。「青柴垣」は神域であることを示すヒモロキ（神籬）のことである。ヒモロキは祭りにあつて神霊の依る樹、招代の意であつたが、清浄な地を選定して周囲に常磐木を植えて神座としたもので、神を迎える祭壇である。額田氏は事代主神を祭る出雲の美保神社の「青柴垣」の神事について、船のなかにつくられる神籬で行われるもので「動く神籬」の例といわれる（前掲書）。

同じく神域を意味する「垣」に「齋垣」「玉垣」「瑞垣」があり、聖域を意味する「垣」に「宮垣」「御垣」があるが、これらはその限定された使用場所における用途が名称となっている。

イカキ（齋垣）

ちはやぶる神の伊垣も越えぬべし今は我が名の惜しけくもなし（万葉11二六六三） 作者未詳

「齋」は忌み清めた、神聖の意をあらわす接頭語で、齋垣は神社など清浄神聖な境界の周囲にめぐらされた垣である。右の相

聞歌は禁忌とされた(人妻などへの)恋が、その成就のために  
はタブーを犯すのもいとわぬほどの激情であることを比喩的に  
表現している。

タマカキ(玉垣)

御諸に 築くや多麻加岐 つき余し 誰にかも依らむ 上  
の宮人 (雄略記、歌謡九四)

玉は美称として神社や宮殿の周囲に設けられた垣をいつたも  
のであるが、本来玉は霊の意味で御霊を守る垣の意と解され、  
古くは石柱を並べた石玉垣であったらしい(額田氏前掲書)。

ミツガキ(瑞垣)

①娘子らが袖布留山の水垣の久しき時ゆ思ひき我は

(万葉450一) 柿本人麻呂

②娘子らを袖布留山の水垣の久しき時ゆ思ひけり我は

(万葉11二四一五) 作者未詳

③楮垣の久しき時ゆ恋すれば我が帯緩ふ朝宵ごとに

(万葉13三二六二) 作者未詳

「瑞垣の」は枕詞。布留の社の垣は年経ているので「久し」に  
かかるとされるが、ミツガキは神社や宮殿の周囲に設けられた  
みずみずしい垣の意で、若木を植えめぐらして作った生け垣が  
最初であったろうと推測されている(額田氏前掲書)。

ミヤカキ(宮垣)・ミカキ(御垣)・オホトノカキ(大殿垣)

a ①諸の隼人等、今に至るまで天皇の宮牆の傍を離れず、吠ゆ  
る狗に代りて事へ奉れる者なり。(神代紀)

②是に螺贏、誤りて嬰兒を聚めて、天皇に奉獻る。天皇、大  
きに咲ひたまひ、嬰兒を螺贏に賜ひて曰はく、「汝、自ら養  
へ」とのたまふ。即ち嬰兒を宮牆の下に養ふ。(雄略紀)

b ③三品刑部親王、從四位下広瀬王、從五位上引田朝臣宿奈麻  
呂、從五位下民忌寸比良夫を造大殿垣司とす。(文武紀、大宝2年12月23日)

④詔して、造宮録正八位下秦下嶋麻呂に從四位下を授け、太  
秦公の姓、并せて錢一百貫、緇一百疋、布二百端、綿二百  
屯を賜ふ。大宮垣を築けるを以てなり。(聖武紀、天平14年8月5日)

c ⑤難波に都つくりたまふ。是を高津宮と謂す。即ち宮垣・室  
屋、聖色せず。(仁徳紀、元年正月3日)

⑥心を削くし志を約めて、無為に従事す。是を以ちて、宮垣  
崩るれども造らず、茅茨壊るれども葺かず。(仁徳紀、4年3月21日)

⑦皇后、且言したまはく、「宮垣壊るれども脩むること得ず。」  
(仁徳紀、7年4月1日)

⑧勅したまはく、「頃聞かく」諸国の役民、造都に勞きて、奔

亡すること猶多し。禁むと雖も止まず」ときく。今、宮垣

ならず。云々」（元明紀、和銅4年9月4日）

⑨天皇、始めて恭仁宮に御しまして朝を受けたまふ。宮垣就  
らず。（聖武紀、天平13年正月1日）

⑩朝を廃す。乍ちに新京に遷り、山を伐り地を開きて、以て  
宮室を造る。垣牆未だ成らず、繞すに帷帳を以てす。

（聖武紀、天平17年正月1日）

aの①と②は天皇に対する信從奉仕の様子を語るものであ  
り、bの③は持統太上天皇の崩によつて作殯宮司とともに殯宮  
を囲む垣を築く仕事を任命されたものであり、④は天平十四年  
正月一日には恭仁宮の大極殿が未だ成らぬまま仮の四阿殿で朝  
賀が行われたが、八月に宮垣が築かれて聖域が確定したことを  
意味するものであろう。

cの⑤～⑦は仁徳天皇の仁政にまつわる物語の記述である  
が、⑧～⑩は元明天皇の平城宮遷都の翌年、右に触れた聖武天  
皇の恭仁宮遷都決定直後、そして聖武天皇のにわかな紫香樂宮  
遷都と、いずれも遷都後の聖域未確定をゆめしい状態と見ての  
記述である。

以上の例は、神の社や、宮廷を囲む「垣」で、神聖な領域で

あることを示している。

#### 四

以上に見てきた「垣」に対して、「歌垣」と「青垣」は特殊性  
を持つているように感じられる。「歌垣」はもちろん素材・造作・  
用途などとはかわりなく、歌う行為に「垣」が結合し、「青垣」  
は青々とした樹林の相にもとづくものではあるが、色が直接的  
に「垣」を修飾しており、先の諸例と基本的には共通する意味  
を持ちながらも、その性格に異質な面を見せている。

#### ウタガキ（歌垣）

「歌垣」については、東国で「カガヒ（耀歌）」ということが  
万葉集および常陸国風土記に見えている。

a①波比具利の岡 この岡の西に歌垣山あり。昔者、男女、集  
ひてこの上に登り、常に歌垣をしけり。

（風土記、撰津国雄伴郡）

②平群臣が祖、名は志毘臣、歌垣に立ちて、其の袁祁命の婚  
はむとせし美人が手を取りき。（略）爾に、袁祁命も、亦、

歌垣に立ちき。

（清寧記）

③天皇、朱雀門に御して歌垣を覽す。（略）歌垣を奉れる男女

らに禄賜ふこと差有り。(聖武紀、天平6年2月1日)

④葛井・船・津・文・武生・蔵の六氏の男女二百卅人、歌垣に供奉る。その服は並に青摺の細布衣を著、紅の長紐を垂る。男女相並びて、行を分けて徐に進む。(略)その歌垣に歌ひて曰はく、(略)時に、五位已上と内舎人と女孺とに詔して、亦その歌垣の中に列しむ。(略)六氏の哥垣の人に、商布二千段、綿五十屯を賜ふ。

(光仁紀、宝亀元年3月28日)

⑤正六位上船連浄足・東人・虫麻呂の三人は、族の中の長老にして、歌垣に率ひ奉る。(光仁紀、宝亀元年4月5日)

b ⑥筑波嶺に登りて嬬歌会を為る日に作る歌一首并せて短歌

(万葉9一七五九題詞) 高橋虫麻呂集

⑦嬬歌は、東の俗語には、賀我比、といふ。

(万葉9一七五九下注) 高橋虫麻呂集

⑧嬬歌の会俗、宇太我岐といひ又加我毗といふ。

(風土記、常陸国香島郡)

c ⑨人の知らむことを恐り、遊場より避り、松の下に蔭り、手携はり膝を促け、懐を陳べ、憤を吐く。

(風土記、常陸国香島郡)

⑩太子、恨を懐き、忍びて顔に発したまはず。果して期りし

所に之きて、歌場の衆に立たして、歌場、此には宇多我岐と云ふ。影媛が袖を執へて、擲躑し従容したまふ。(武烈紀)

a ①は地方における「歌垣」、②は中央における平群志毘と袁祁命が美人をめぐつて争う「歌垣」であるが、③④⑤の「歌垣」は宮城の朱雀門前の広場や行幸先における風流都雅となっていることは周知の通りである。

b ⑥の「嬬歌会」は高橋虫麻呂歌集中の長歌の題詞に見られるものであり、⑦はその長歌末尾に付けられた「嬬歌」の訓みについての注記であるが、⑧は「嬬歌」が「歌垣」と同じであることを示した常陸国風土記の注記である。この「嬬歌」の文字は文選の「魏都賦」で蜀の風俗に触れるなかに、

或いは明発まで嬬歌し、或いは浮泳して歳を卒ふ。

と、男女が手をつなぎ夜通し歌い踊る様が記述される箇所に見られる。この漢語が宛てられたものであろう。

c ⑨は⑧の「嬬歌の会」を「遊場」と記しているものであるが、⑩は「歌場」と記しながらその注の訓みで「歌垣」であることを示している。

この「歌垣」については、土橋寛氏が旧来の諸説を検討して、場の意味とする説を否定され、「歌垣」は「飲食・歌舞・性的解放ないし婚約の三つを基本的な内容とする行事」であること、

そして「カガヒ」ともいわれるその語義について

「常為<sub>三</sub>歌垣<sub>二</sub>」(『摂津風土記逸文』)、「為<sub>三</sub>耀歌会<sub>二</sub>」(万、一七五九の詞書)と記されているを見れば、場所を意味する語ではなく、何らかの行為を意味する語であることは疑いない。

と、「歌掛き」が原義であろうと主張された(『古代歌謡と儀礼の研究』昭和40年)。

記紀歌謡の志毘臣と袁祁命の歌における掛け合いの例や、「歌垣」の歌の発想を継承すると考えられる万葉歌の相聞的問答の例を見ると、氏がいわれるような機能が実質であったと思われるが、右の例の⑩の注に「歌場、此には宇多我岐と云ふ」とあるところを見れば、「歌掛き」のように歌が機能する特定の「場」としての意味を全面的に否定できないように思われる。そうでなければ、「耀歌」の外に「歌場」「遊場」と記されたり、その他は一貫して「歌垣」と記されていることが理解できない。

「歌垣」が行われる特定の領域は、

この山を うしはく神の 昔より 禁めぬわざぞ 今日のみは めぐしもな見そ 事もとがむな(万葉9一七五九)

高橋虫麻呂集

などとあるように、その土地の神の許しによって一定の時期に

限って行われる農耕儀礼にもとづく神事の場であったことは疑いない。「耀歌の会」に宛てられた「遊場」の「遊」も、芸能となる歌・舞・管弦の演奏が神事(神遊び)にかかわっていた由来を示す語であると考えられることから(折口信夫氏「神道芸能の話」『折口信夫全集ノート編 第六巻』)、「歌掛き」がおこなわれる場が本来的に聖域であったことを示すものであったから、「ウタカキ」に「歌垣」の字が宛てられたとみるべきではあるまいか。

「歌垣」について、森朝男氏は「かき」に問題が残るとされつつも、「歌垣」は神事にかかわりながらも、特定の神事そのものではなく、神事の周縁部の歌舞を中心に指した呼称であると言われた(「歌垣・対唱形式・三輪山」『古代和歌と祝祭』昭和63年)。この卓見によって歌垣の歌舞における変質の意味も理解しやすくなると思われる。

## 五

「青垣山」・「青垣隠り」の「青垣」の場合はどうか。まず「青垣山」の例を見よう。

アヲカキヤマ(青垣山)

a ① たたなづく青垣山のへなりなばしばしば君を言とはじかも

(万葉12三一一八七) 作者未詳

② ……たたなはる 青垣山 山神の 奉る御調と 春へは 花

かざし持ち 秋立てば 黄葉かざせり… (万葉1三八)

柿本人麻呂

b ③ 天下造りましし大神大穴持の命…長江山に來坐して詔り

たまひしく、「我が造り坐して命く国は、皇御孫の命平世知

らせと依せ奉らむ。但、八雲立つ出雲の国は、我が静まり

坐す国と、青垣山廻らし賜ひて、珍玉置き賜ひて守らむ」

と詔りたまひき。(風土記、出雲国意字郡)

④ 天の下造らしし大神の命、詔りたまひしく、「八十神は、青

垣山の裏に置かじ」と詔りたまひて、追ひ發ちたまふ時、

此処に治次坐しき。(風土記、出雲国大原郡)

⑤ 掛けまくも恐き明つ御神と、大八島国知ろしめす天皇命の

大御世を、手長の大御世と齋ふともし後の齋ひの時には、後の

字を加へよ。して、出雲の国の青垣山の内に、下つ石ねに宮

柱太知り立て、高天の原に千木高知ります、いざなきの日

まな子、かぶろき熊野の大神、くしみけのの命、国作りま

しし大なもちの命二柱の神を始めて、百八十六社に坐す皇

神等を、(略)しづ宮に忌ひ静め仕へまつりて、云々。

(出雲国造神賀詞)

a ①は相聞歌であるが、その初二句について武田祐吉氏は「古歌謡から来た慣用句ではあるが、これがあって歌に生色がある」(『増訂萬葉集全註釈』昭和31年)と評されたが、青垣山に對する讚美と畏敬がかえって悲別の情に陰りを与えているようである。

②は冒頭に触れた柿本人麻呂の吉野從駕歌(1三八)の「たたなはる 青垣山」である。この二例以外は、すべて「出雲」に関する記事に見られる。

③は、大穴持命(大国主神)が、造り治めた国を天つ神の子孫に譲渡し、自分は出雲に鎮座する国つ神として、「青垣山」を周囲にめぐらして、靈力の象徴である「珍玉」を置いて国を守ろうと述べている。青垣山は神域であり、その自然がそのまま神籬(ヒモロギ)を意味するのであろう。これと対照的な記事が④で、大穴持命が、自分に危害を加えた兄弟の八十神たちを「青垣山」の守る内には入れずに放逐したという。清浄な聖域は対立的な邪悪の共存を許さないことによつて、一層神聖さを高めることを示している。⑤は世襲で出雲国を統括する出雲国造が新任の際に、一年の潔斎の後、朝廷に出て出雲の神からの祝

詞を述べるのが出雲国造神賀詞で、そのなかで大八島を治める天皇の寿命の長久を祝い籠めるために、出雲の「青垣山」の中に須佐之男命（島根県熊野神社のくしみけの命は別名）と大國主神（大穴持命の別名）二柱をはじめ、朝廷が幣帛を供える一八六社を鎮める「しづ宮」に国造が籠って神々を祭り、天皇を守るという祝詞を得、それを天皇に奏上するという内容で、その出雲の神の鎮座する場が「青垣山の内」であり、これは聖なる神域を表現することは言うまでもない。出雲の国造が代替わりごとに宮廷に奏上して服従奉仕を確認する詞は、出雲の神域「青垣山」の中に鎮まる出雲の神の須佐之男命とその子孫大穴持命の、天皇の長久を祝福する詞であるという。風土記や神賀詞においては、外界から神域を隔絶させる「青垣山」は、出雲に下って国造りの基礎を築く事業をなし遂げた神の鎮まる場所であった。

アラカキ（青垣）

①爾に、大國主神の曰ひしく、「然らば、治め奉る状は、奈何に」といひしに、答へて言ひしく、「吾をば、倭の青垣の東の山の上につき奉れ」といひき。此は、御諸山の上に坐す神ぞ。  
（神代記）

②倭は 國の真秀ろば たたなづく 安袁加岐 山隠れる

倭し麗し  
（景行記、歌謡三二）

③倭は 國のまほらま 疊づく 阿烏伽枳 山隠れる 倭し麗し  
（景行記、歌謡三二）

④淡海は 水渟む国 倭は 青々 垣々の 山投に坐しし 市辺の天皇が御足末奴津らま  
（風土記、播磨国美裏郡）

①は一緒に国を造り固めた少名毘古那が常世の国に渡った後に、大穴持命の前に出現した神（大物主神）が、大和の青垣の東の山（御諸山）の上に祭ることを要求する。神話的世界の葦原中国は現実の大和を中心とする天皇の世界と重なり合い、「青垣」は神話的世界で出雲と大和と同軸となっている。②と③は、「疊なづく青垣」の山に囲まれ籠もっている大和は国中で最もよい所とする大和讚美の歌であり、④の歌では、自分が市辺の天皇（押磐の皇子。於奚〔仁賢〕・袁奚〔顕宗〕両天皇の父）の子孫であると由緒ある血筋であることを宣言している。そのなかの「青垣」は大和の讚美の表現であり、「青垣」が神域・聖域であることを意味している。

六

赤人の吉野從駕歌の「青垣隠り」は、このような常套的な讚



美表現を踏まえていることは間違いないとして、その意味にとどまるだけであろうか。

出雲と大和に用いられていた「青垣」の語を、吉野で用いたことについて、賀古明氏は

本来、大和地方の讚美修飾語である「青垣」の語が、吉野に関して用いられていることは、外形的観察として、地域の広狭の違いこそあれ、大和地方も、吉野川岸の地も、共に、青々とした山々に包まれた地形の類似していることによるもので(略)思惟基底には、吉野の山々、また、吉野の川の上流の川岸の地が古くから、大和地方の人々にも、万葉人にも、神聖な神秘的な地としての伝承に立脚する印象が持たれており、更に、この地、特に、吉野川上流岸の地が、離宮の地とされることよって訪れる機会を多く得、特に、その地の景勝に強く心を索かれ、第二の「大和」の地として尊ばれ、また親しまれるに至っている(前掲書)。と述べられたのは妥当であろうが、さらに次のような表現が日本書紀に見られることも考慮すべきではあるまいか。

「抑又、塩土老翁に聞きき、曰ししく、『東に美地有り。青山四周れり。其の中に、亦天磐船に乗りて飛び降る者有り』とまをしき。余謂ふに、彼の地は、必ず大業を恢め弘べ、

天下に光宅るに足りぬべし。蓋し六合の中心か。厥の飛び降る者は、謂ふに是饒速日か。何ぞ就きて都つくらざらむや」とのたまふ。(神武即位前紀)

神武東進の理由を示す記事の中に見られる「青山四周れり」とは「青垣山」であり、天から「飛びくだったもの(饒速日命)の籠るところである。「青垣隠り」と言うのにふさわしいこの領域を、即位前の神武は「天つ日嗣の大業を弘め、天下に君臨するに足りる所」であり「六合の中心」と判断する。饒速日命については、神武の強敵長髓彦が奉じていた神で、櫛玉饒速日命ともいう。天孫は日向に降臨するが、そのほか各地に天孫として降臨した神がいたらしく、その一例が大和の天孫である饒速日命であるといわれる。この神の子宇摩志麻遲命は、大和朝廷の有力氏族となった物部氏・穗積氏の祖である。饒速日命の帰属によつて大和が完全に平定されることになる。折口信夫氏は、天皇が大和を治めるには、大和の神の魂を身体に付着させねばならず、饒速日命が長髓彦に付いていた間は神武に不利であったが、饒速日命が神武に付くと勝利を収めるのであり、この魂を身に付けたものが大和を治める資格を得たことになる(この大和の魂を取り扱ったのが物部氏であった)と述べられた(「大嘗祭の本義」『折口信夫全集 第三巻』昭和41年)。

神武紀は、天皇の大和平定伝説の中で天皇の地位につくため  
の宗教的政治的な意義を説明していると見るべきであろう。そ  
の記述で、青山四周れる東の美地、と方位の東と色彩の青が結  
びつけられ、そこに天皇の誕生と国の生成発展を期待する觀念  
の底には陰陽五行思想が働いていると見るべきかも知れない。

神武天皇についてこのような伝説を記述する日本書紀が、聖  
武天皇の即位間近い前代の元正天皇の養老四年（七二〇）に完  
成していることを考えると、山部赤人の吉野從駕歌における「青  
垣隠り」という表現は、柿本人麻呂の吉野從駕歌の「青垣山」  
とは違った意味で、宗教的政治的意義が新たに確認され、その  
ことが自覚された上で選ばれた表現であったと言えるのではな  
かろうか。

そのように推測する背景として、第一に、この吉野行幸の前  
年の神龜元年二月四日の即位の宣命の中で、

進むも知らに退くも知らに、天地の心も勞しく重しく、百  
官の情も辱み愧しみなも、神ながら念し坐す。故、親王等  
を始めて王たち臣たち汝たち、清き明き正しき直き心を以  
て、皇が朝をあななひ扶け奉りて、天下の公民を奏し賜へ  
と詔りたまふ命を、衆聞きたまへと宣る。

と聖武天皇は親王以下百官に「清き明き正しき直き心」をもつ

て天皇の政治を助けるように求めていること、第二に、同じく  
神龜元年（七二四）十一月二十三日には、

十一月丁巳朔己卯（二十三日）、大嘗す。備前国を由機とし、  
播磨国を須機とす。從五位下石上朝臣勝男・石上朝臣乙麻  
呂、從六位上石上朝臣諸男、從七位上榎井朝臣大嶋ら、内  
物部を率ゐて、神楯を齋宮の南北二門に立つ。

と大嘗祭の秘儀が行われて、聖武天皇は皇祖神に神饌を親供し、  
自らも新穀新酒を食して天つ日嗣を受け継ぐ天皇としての資格  
を身につけていたことが考え合わせられるのである。

そのようにして、明くる年の神龜二年の夏五月に再び吉野に  
行幸したのであれば、自然の山々も実景として生命力に満ち緑  
豊かで「青垣」にふさわしくあつたであろうし、実質的な天皇  
として出現したばかりの聖武天皇が臨む吉野の宮を讚美するの  
に、從駕した大宮人たちの記憶にも新しい即位大嘗祭の慶事に  
触れるのは当然のことであつたろう。

同日の笠金村の從駕歌には、

あしひきの み山もさやに 落ちたぎつ 吉野の川の 川  
の瀬の 清きを見れば 上辺には 千鳥しば鳴く 下辺に  
は かはづ妻呼ぶ ももしきの 大宮人も をちここに  
繁にしあれば 見るごとに あやにともしみ（六九二〇）

と川瀬の「清く明き」景の中に、千鳥やかはづが呼応し、大宮人も「清き明き正しき直き心を」もって奉仕する様が描写されており、赤人もまた「川なみの 清き河内」と表現している。

赤人は特に「やすみしし 我ご大君の 高知らず 吉野の宮は たたなづく 青垣隠り」と表現しているが、それは青垣山に囲まれた吉野の宮を、玉垣に囲まれた大嘗宮のイメージを重ねあわせ、籠りによる秘儀を経て出現した新生天皇への讃仰の意を込めようとしたのではなかったか。

このように想像するのは、宮殿から出御する天皇を讃美する歌が存在するからでもある。

二十年の春正月の辛巳朔にして丁亥(七日)に、置酒して群卿に宴す。是の日に、大臣、寿上りて歌して曰さく、

やすみしし 我が大君の 詞句理摩須(隠ります) 天  
の八十蔭 出で立たす みそらを見れば 万代に か  
くしもがも 千代にも かくしもがも 畏みて 仕へ  
奉らむ 拝みて 仕へまつらむ 歌づきまつる

(推古紀、歌謡一〇二)  
とまをす。

推古天皇二十年正月七日、「人日」にあたって中国風の新しい節日の宴が催され、天皇は群卿に酒を振舞ったが、大臣の蘇我

馬子が酒杯を献じて寿歌を詠み、「やすみしし 我が大君」が籠っていた宮殿から出御して、天候によってその年の人々の運勢を占うために見上げる天空に託して天皇を讃美し、臣下としての畏敬と奉仕を誓ったものであろう。

「みそら」についての解釈は異なるが、土橋寛氏はこの歌に新しい寿歌の成立を認めておれる点は重要であろう(『古代歌謡全注釈 日本書紀編』昭和51年)。すなわちこの一首に「地上的なものから天上的なものへ、呪術的なものから宗教的なものへ、氏族的な心情から官僚的心情へという風に宮廷寿歌の変化を捉えることができる」とされ、この変化は歌の場の変化と関係があり、古い寿歌が大嘗会の場で各氏族によって奏せられたものが、この歌は正月七日の節日に官僚によって奏せられていると指摘されていることである。大嘗祭の祭祀構造について岡田精司氏は、古く大化前代からの新嘗儀礼の形態も含み、その原形としての祭祀構造にこそ「天上の儀」「神代の風儀」が備わっていたであろうと言われるが(『大嘗の祭り』平成2年)、この寿歌における「やすみしし 我が大君の 隠ります 天の八十蔭」の表現には、大嘗の儀礼の行なわれた宮殿に対する讃美が揺曳しているように思われてならない。

神武即位前紀においては、青山に隠れる中に天孫が降臨し、

国の中心として国家統治の中心ともなるといふ思想を表した。その讚美的性格は政治的支配に対する讚美へと結びついている。赤人の「青垣隠り」といふ表現はこの次元で考える必要があるのではなからうか。

先例の人麻呂の「青垣山」は神聖な山に対する讚美を示し、そのような山の神が服従奉仕することにおいて天皇の絶対的な尊貴性を讚仰するものとなった。赤人の「青垣隠り」は、吉野離宮の所在が山並みの続く「青垣隠り」と川波の続く「清き河内」に囲まれた領域内にあることを示すことで讚美の心を表している。「青垣隠り」「清き河内」は、天皇の臨む地に適う属性としての「神聖」と「清浄」を美的に表現しつつ、その觀念としては、大和であれ吉野であれ、天皇の存在が国家の中心であり治世の中樞であるという政治性倫理性に結びつくものである。中でも「青垣隠り」といふ表現は、聖なる空間に籠ることによって聖なる存在として出現するという信仰を抽象化した修辭として用いていると言えるであろう。

冒頭でも触れたように、「神龜二年乙丑の夏の五月」の吉野行幸の題詞をもつ笠金村の吉野従駕歌に次いで収められている赤人の従駕歌の第一群は、「青垣隠り」といふ詞句によって、前年の大嘗祭で名実ともに明つ神たる天皇の資格を體現したという

事実を表象したのであって、神龜二年五月の行幸の場で披露されるにふさわしい従駕歌に仕立てられたと考えられるのである。

注

本文中で省略した「垣」の例をここにあげておく。

A 素材を名称にもつ垣

アシガキ（葦垣）

a ①おしてる 難波の国は 葦垣の 古りにし里と 人皆の 思ひ やすみて……（万葉6九二八） 笠金村

②……別れし行けば 闇夜なす 思ひ惑はひ 射ゆ鹿の 心を痛み 葦垣の 思ひ乱れて……（万葉9一八〇四） 田辺福麻呂集

③……天雲の 行くら行くらに 蘆垣の 思ひ乱れて 乱れ麻の つかさをなみと……（万葉13三二七二） 作者未詳

b ④花ぐはし葦垣越しにただ一目相見し子ゆゑ千たび嘆きつ（万葉11二五六五） 作者未詳

⑤人間守り蘆垣越しに我妹子を相見しからに事ぞさだ多き（万葉11二五七六） 作者未詳

⑥蘆垣の中にこ草にこよかに我と笑まして人に知らぬな（万葉11二七六二） 作者未詳

⑦葦垣の末かき別けて君越ゆと人にな告げそ事はたな知れ（万葉13三二七九） 作者未詳

⑧我が背子に恋ひすべなかり安之可伎の外に嘆かふ我し悲しも

(万葉17三九七五) 大伴池主

⑨安之可伎の外にも君が寄り立たし恋ひけれこそば夢に見えけれ

(万葉17三九七七) 大伴家持

⑩阿之可伎の隈処に立ちて我妹子が袖もしほほに泣きしぞ思はゆ

(万葉20四三三七) 防人刑部千国

シバカキ(柴垣)

①大君の心を緩み 臣の子の八重の斯婆加岐 入り立たずあり

(清寧記、歌謡一〇七)

②大君の御子の志婆加岐 八節縛り 縛り廻し 切れむ志婆加岐 焼けむ志婆加岐

(清寧記、歌謡一〇九)

③臣の子の八節の之魔柯枳 下勤み 地震が揺り来ば 破れむ之魔柯枳 一本に、八節の之魔柯枳、を以ちて、八重智羅智枳(韓垣)、に易ふ

(武烈紀、歌謡九一)

タカカキ(竹垣)

あらたまの寸戸が竹垣編目ゆも妹し見えなば我恋ひめやも

(万葉11二五三〇) 作者未詳

アヤカキ(綾垣)

……我はもよ 女にしあれば 汝を除て 夫は無し 汝を除て 夫は無し 阿夜加岐の ふはやが下に 蚕衾 和やが下に 袴 衾 騒ぐが下に……

(神代記、歌謡五)

キヌカキ(純垣)

故、(宇遲能和紀郎子)聞き驚かして兵ひとを河の辺に伏せ、亦、其の山の上に、純垣を張り帷幕を立て、詐りて舎人を以て王と為

て、露に呉床に坐せ、百官が恭敬ひ往来ふ状、既に王子の坐す所の如くして、…… (応神記)

イハカキヌマ(石垣沼)・イハカキフチ(石垣淵) (岩石が垣のようにめぐっている沼や淵)

a ①青山の石垣沼の水隠りに恋やわたらむ逢ふよしをなみ

(万葉11二七〇七) 作者未詳

b ②……大船の 思ひ頼みて 玉かざる 磐垣淵の 隠りのみ 恋

ひつつあるに…… (万葉2二〇七) 柿本人麻呂

③まそ鏡見とも言はめや玉かざる石垣淵の隠りてある妻

(万葉11二五〇九) 柿本人麻呂集

④玉かざる石垣淵の隠りには伏して死ぬとも汝が名は告らじ

(万葉11二七〇〇) 作者未詳

B 造作を名称に示す垣

アラガキ(荒垣)

①里人の言寄せ妻を荒垣の外にや我が見む憎くあらなくに

(万葉11二五六二) 作者未詳

②かな門田を安良我伎間ゆ見日が照れば雨を待とのす君を待とも (万葉14三五六一)

作者未詳

クミカキ(組垣)

大君の 八重の矩瀨智枳 懸かめども 汝を編ましじみ 懸かぬ俱弥柯枳

(武烈紀、歌謡九〇)

マガキ(籬)

①我妹子がやどの籬を見に行かばけだし門より帰してむかも

(万葉4七七七) 大伴家持

② うつたへに前垣の姿見まく欲り行かむと言へや君を見にこそ

（万葉4七七八） 大伴家持

③ 奈良山の嶺なほ霧らふうべしこそ前垣が下の雪は消すけれ

（万葉10二三一六） 作者未詳

④ 大野に到りて日暮れぬ。山暗くして進行むこと能はず。則ち当邑の家の籬を壊ち取りて燭とす。

（天武紀、元年6月24日）

カラカキ（韓垣）（韓様式の土塀〔塙〕か）

① 臣の子の 八重や智羅智枳 ゆるせとや御子（武烈紀、歌謡八八）

② 臣の子の 八節の之魔柯枳 下勤み 地震が揺り来ば 破れむ  
之魔柯枳一本に、八節の之魔柯枳、を以ちて八重智羅智枳、に易ふ

（武烈紀、歌謡九一）

## Yamabeno Akahito's *In Praise of Yoshino*: "Aokaki komori"

Izuru MURAYAMA

### Abstract

On May 5th of Jinki (725A.D.), in the Nara Period, the new emperor Shomu and his inner court visited the detached palace of Yoshino. With his inner court were the court poets Kasano Kanamura and Yamabeno Akahito, who presented the emperor with poems in praise of the palace. In his old-fashioned poem *In Praise of Yoshino*, the traditionally - minded Yamabeno Akahito, employed the unusual expression "aokaki komori" —"aokaki" meaning "a chain of blue mountains like a fence" and "komori" meaning "to shut oneself up in a sanctuary".

This paper speculates that this expression is related to *Daijo-sai*, the most important ceremony entronement which had been held on November 23rd of the previous year. In the *Daijo-sai* ceremony, the new emperor shuts himself up in the Daijo Palace and takes a religious meal with his ancestral god, and is thus transformed into the true emperor. I speculate that Yamabeno Akahito used the words "aokaki komori" to symbolize this entronement ceremony.